



発行日：平成 28 年 12 月
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第 32 回海部会 WG を開催しました！

11 月 2 日（水曜日）に第 32 回海部会WGが西尾市で開催されました。今回の WG では、海ごみ・川ごみ問題の普及啓発のため全国的な活動に取り組まれている市民団体からの参加者も加わりました。



日時：平成 28 年 11 月 2 日（水） 13:30~15:30
場所：西尾市役所会議棟
参加者：26 名（事務局含む）

◆主な会議内容

1.東幡豆干潟造成箇所のモニタリング結果報告



- 平成28年3月から本格的なモニタリング調査に着手しています。
 - ・地形：地盤の高低差に大きな変化はありません。
 - ・水質：良好な状況です。
 - ・底質：粒度組成に大きな変化はなく、汚濁傾向もありません。
 - ・底生動物：アサリなどの貝類の生息が豊富です。
- ダム砂を投入した箇所付近は、生物の生息場所として良好な環境が形成され、その効果が発揮されていると言えます。



2.矢作川河口干潟造成箇所のモニタリング結果報告



- 底生動物の確認種は増加傾向にあり、シギ・チドリ類も施工干潟を利用する状況が確認されるなど、生物の生息場として機能しています。
- ヨシ原面積は、施工に伴い拡大しており、ヨシに依存するカニ類やオオシキリなどの鳥類の生息場として機能しています。



3.川ごみ・海ごみ対策について



- 全国の海・川ごみ問題に取り組まれている社団法人JEANの金子さん、全国川ごみネットワークの伊藤さんから近年のごみ問題の課題について報告がありました。
- 今後は、ごみ問題の解決手法の検討に向けて国内からモデル河川を抽出し、関係者が議論、調査する場を設置する方針とのことです。



4.意見交換



●出席者による主な意見交換内容は、以下のとおりです。

(・意見 > 回答)

(1) 東幡豆干潟造成箇所のモニタリング結果報告

- ・ 造成干潟での調査結果をみると、春に着底したアサリが成長して、夏に 1~2 mmサイズにまで成長しているように考えられる。一方、近隣の既存干潟の調査地点では アサリが確認されていない。地形もあまり変わっていないということだが、考えられる理由はあるか？(鈴木)
- 地盤の高さ、底質もほとんど変わらない。着底稚貝の数が造成干潟と比較して少ない傾向にある。(事務局)
- ・ 単純に考えると、ダム砂を入れた造成干潟はアサリや底生動物にとって、良好な生息場となっていると考察できる。ダム砂は大きな礫から細かい砂まで多様な粒径で構成されており、多孔質な空間が形成されている。これが色々な底生動物の生息場として良好な状況を形成している。また、着底稚貝が触手を出して、アンカーとしても機能するなど、非常に多様な環境があるということである。(鈴木)
- ・ 粒子が一樣になるということは空間もなければ、抵抗物もない。何もなければ、石や粒径の違ったものがあったほうが反射波の防止にもつながる。この干潟を造成する前に、地元の石材屋から玉石があるということで、それを頂いて干潟に投入した。その空きスペースにちょうど土壌が合ったということで、一番流れにくいところにダム砂を投入した経緯がある。(石川)
- ・ 造成干潟の周辺にある玉石が防止効果となって、造成干潟の環境が安定しているとみてよいか。(石田)
- 玉石の効果で環境が安定していると考えてよいと思う。(石川)

(2) 矢作川河口干潟造成箇所のモニタリング結果報告

- ・ 人工干潟の土砂はどこから運んできたものか？(青木)
- ヨシの切り下げを行っている施工現場の土砂を入れている(事務局)
- ・ ヤマトシジミは施工箇所の上流側、アサリは施工箇所の下流側に多いと見てよいか。施工箇所の上流側、下流側で種類の違うものが出てくるというのは、おもしろい現象だと思う。(鈴木)
- シジミとアサリの生息の違いは、地盤の低いところにアサリが多く、地盤の高いところにシジミが多いということであり、海水(塩分)の影響が大きい。(石田)
- ・ 川の干潟は、平水時にはほとんど変化していないが、年に1回あるかないかの大出水のときに、大きく動く。動くことによって、下流に造成した干潟が覆われるような形になる。今は動きつつある途中である。一方、ヨシ原は出水によって地盤が上がることによって、オギが増えたり、場合によってはヤナギが生育するなど陸地化してしまう。ヨシ原を維持するには人為的に掘削する必要があるということがわかってきた。(石田)

(3) 川ごみ・海ごみ対策について

- ・ 国土交通省や環境省と連携して、川ごみの削減対策を議論、検討するモデル河川を抽出することを提案しており、その1つに矢作川流域を候補として考えている。(金子)
- ・ 流域圏懇談会では矢作川だけでなく、奈佐の浜プロジェクトなどのように伊勢湾・三河湾全体の観点から活動している方がメンバーに入っていることも、中部地方の河川で候補の一つとなった理由である。(國村)
- ・ 海のごみ問題は法律もできて、世界的な動きになりつつある。来年以降、川の中でのマイクロプラスチックの実態把握もするべきという議論もできている。(金子)
- ・ ヨーロッパではデポジット制度があって、かなり効果があるのではないかなと思う。ただ単にごみを拾うだけではなくて、制度的にどうすることが現状必要なかを勉強していきたいと思う。(井上)
- ・ 流域圏懇談会自体も、ごみの問題で方向性が決まっているものではないので、モデル的な話をみんなでやろうということになれば、最終ゴールへの近づき方としてはいいと思う。(青木)

今後の予定



第33回海部会WGは12月20日に開催されます。

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 大森、技官 宇野

TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100

*矢作川に関する情報は、矢作川流域圏懇談会メーリングリスト(yahagigawa@iijnet.or.jp)までお送りください。

